

「自助」「共助」「公助」という言葉があります。東日本大震災後にまとめられた平成二十六年版『防災白書』には、次のような記載があります。

東日本大震災等では、行政が全ての被災者を迅速に支援することが難しいこと、行政自身が被災して機能が麻痺するような場合があることが明確になったことから（「公助の限界」）、首都直下地震、南海トラフ地震等の大規模広域災害時の被害を少なくするためには、地域コミュニティにおける自助・共助による「ソフトパワー」を効果的に活用することが不可欠である。

この記載は、大規模災害を前提に記されていますが、それ以外の災害においても、自助・共助は重要になるでしょう。

Aさんは昨年、離れて暮らす親戚の自宅が水害に遭いました。数日後に駆け付けた時、すでに他の親戚が集まり、泥の搬出はおおむね終えていたものの、家財道具の処分など多くの作業が残っていました。

泥をかぶった家財道具は外に運び出さなければなりません。特に古い畳は水を吸って重くなり、大人四人でも簡単には持ち上がりません。そうした粗大ごみを町のごみ集積場へ運び、真夏の最中、汗だくになりながら、その道を何度も往復しました。

親戚の家だけでなく、周囲の家の方々と協力し、高齢世帯の片づけを手伝ったり、軽トラックを融通し合って泥や家財道具を運んだりしました。また、泥が乾いて砂埃が舞うようになると、住民同士で協力して



家族や地域の絆を深めて 助け合いの輪を築いていく

道路を洗い流しました。やるべきことはまだ多く残るものの、一週間ほどでなんとか親戚が生活できる状況までこぎつけました。この集落は川の近くにあり、氾濫した水が押し寄せて浸水しました。地面の高さや床の高さなど、様々な立地条件の違いによって被害の大きさも異なりました。

同じように異なっていたのが、手伝いに来る人々の事情でした。Aさんの親戚と同様に、遠方から親族が駆け付けて支えている家もありました。若い世代が多く住む分譲住宅地では、普段からの協力関係もあつてか、住民同士で協力して片づけを進める姿が見られました。一方で、ほとんど手伝いに来る人のいない家もあったのです。行政としては状況の把握だけでも大変だったようで、被災者が本来期待する助けを十分に得られない場面も垣間見えました。

災害に備えるためには、日ごろの備えや災害発生時の自助努力が大切です。一方で、災害が大きくなればなるほど、一人でできることには限界が生じます。また公助も災害の規模が大きいくほど、迅速な支援は難しくなります。だからこそ、冒頭に述べたように自助の重要性が高まるのです。

自助の基盤となるのは、共同体としての絆の深さです。親子や夫婦の良好な関係はもちろん、兄弟姉妹や親戚が継続的に顔を合わせ、日頃の近所づきあいや町会活動に参加することが大切です。さらに、多様な共同体とのつながりを広げ、いざという時に助け合える関係を築きたいものです。